

令和3年度第2回 山県市立小学校及び中学校適正規模等検討委員会議事録（要旨）

日時

令和4年3月24日（木） 午後2時00分～午後3時50分

場所

山県市役所3階大会議室

出席者

委員	早川 三根夫	学識経験者
	山崎 通	市議会議員
	高屋 重義	市自治会連合会が推薦する者
	高井 逸夫	市自治会連合会が推薦する者
	藤根 圓六	市自治会連合会が推薦する者
	神原 義典	市PTA連合会が推薦する者
	上野 泰英	市PTA連合会が推薦する者
	岩田 陽歩	市立保育園長会が推薦する者
	佐藤 千秋	市立保育園長会が推薦する者
	奥田 真也	市立保育園長会が推薦する者
	高橋 広美	市立小中学校長会が推薦する者
	花村 伸二	市立小中学校長会が推薦する者
	岡崎 佳代子	市立小中学校長会が推薦する者
事務局	教育長	服部 和也
	学校教育課長	日置 智夫
	学校教育課課長補佐	渡瀬 和則

欠席者

委員	松井 元成	市PTA連合会が推薦する者
----	-------	---------------

日程

- 1 開会
- 2 委員長あいさつ
- 3 前回議事録の確認
- 4 議事
 - (1) 配布資料説明
 - (2) 学校の規模に関するアンケート調査結果に関する意見交換
 - (3) 論点整理
- 5 次回の委員会予定

日時 令和4年6月1日（水） 午後2時～午後3時30分

場所 山県市役所 3階 大会議室
6 閉会

会議の概要
別添のとおり

1 開会

午後2時00分開会

2 委員長挨拶

前回、委員の皆さんから要望があった資料について、事務局が用意した。それについて事務局に説明してもらい、質疑応答をする。その後、意見をいただく。

3 議事録の確認

(略)

4 議事

- 委員長 ・第1回の会議で、委員の皆さんから要望があった資料について、事前に配布しているが、事務局から簡単に説明願う。
- 事務局 説明(略)
- 委員長 ・基礎的ないい資料がそろったと思うが、教育界にいる者でなければわかりづらいかも。どこからでもいいので質問をどうぞ。
- 委員 ・資料5の「校務支援システム整備率」「普通教室の大型提示装置配備率」について説明願う。
- 課長 ・「普通教室の大型提示装置配備率」というのは、デジタル教科書を映す大型テレビや電子黒板の配備率。「校務支援システム整備率」というのは、学校の成績表や出欠簿など紙ベースで作成していたものを県下統一したシステムで作成するようになったもので、その整備率。市内全ての学校でそのシステムの準備ができた。
- 委員 ・準備ができたということだけで、まだ使用されていないということか。
- 課長 ・中学校は令和3年度から使用しており、小学校は令和4年度から使用する。
- 委員長 ・「全国順位」というのは意味があるのか。
- 課長 ・前回、資料の要望と同時に「全国レベルでどれぐらいなのか」という要望もあり、国から届いている資料の順位を参考として掲載した。順位よりも整備率を見てもらうとわかりやすい。
- 委員 ・資料4について詳細に説明してほしい。
- 課長 ・「一般校」とは、現在の山県市の小中学校のかたちという理解を。
・「小中一貫校」とは、小学校の6年生、中学校の3年生はあるが、小学校と中学校が比較的近い場所にあって、9年間を一貫して教育を行うもの。一般的な組織として、校長が1人、副校長が1人、教頭が小中に1人ずつ。
・「学校間連携」の「弾力的な制度設計」というのは、小学6年生が中学校の校舎で学習することができるということ。
・「小学校教科担任制」の「中学校から派遣」というのは、例えば、中学校の英語の教師が小学校へ派遣されて英語の授業を行うということ。
・「義務教育学校」とは、9年間をひとつの学校で学ぶというもの。

- ・「課程の分割可」というのは、例えば、小1から小3まで、小4から中1まで、中2から中3までをひとつのかたまりとして教育課程を組むことができるということ。
- ・「独自教科の設定」の「可」というのは、一般校で行っている「ふるさと教育」などを、教科のひとつとして位置づけることができるということ。
- ・「学校間連携」の「柔軟に対応」というのは、子どもも教員も同じ学校にるので、柔軟に対応ができるということ。
- ・「小学校教科担任制」の「学校内で割振り」というのは、派遣ではなく、ひとつの教員の集団の中で割り振るということ。

- 委員 ・小中一貫校というものは、別々の校舎でもあり得るのか。
- 課長 ・あり得る。
- 委員 ・小学校の教科担任制というものは、いつからか。
- 課長 ・正式には来年度からだだが、今までも図工や書写で行っている。
- 委員 ・現在も行われていて、それを広めるという解釈でよいか。
- 課長 ・そのとおり。小中一貫校や義務教育学校は、それが容易にできるというメリットがある。
- 委員長 ・一般校というものは、普通の学校。日本の教育制度は、中学校の3年、高校の3年という一番大事な思春期のときが途切れ過ぎるという反省があり、中高一貫校で6年制を進めようというのが国の政策だった。ところが、中学校は市町村立が多く高校は県立が多いということで、うまく進まなかった。つくってもエリート校になってしまうという心配もあり、実際には、都会の私学が中高一貫校をたくさんつくった。
 - ・義務教育としては、中高一貫校よりも小中学校の連携のほうが大事で、中学生になった途端に不登校が増えてしまうので、そこを滑らかにするために小中一貫校を考えていこうとなった。実際には、小学6年生は身体も大きいので、中学校に入れたほうがいいのではという意見もあり、それをしやすくしたのが義務教育学校ということ。このような結果、いろいろなバリエーションの学校ができた。
 - ・義務教育学校は、県下で少しずつ増える感じである。義務教育学校のほうがスムーズでいいという意見もあれば、逆に小学校と中学校はきちんとけじめをつけたほうがいいという意見もある。
- 委員 ・資料5について質問。1点目は、令和3年3月1日現在と令和3年10月現在を比べると、数値が上がっていて改善されているということはわかるが、一部100%になっていない項目もある。今後100%を目指すのかどうか。
 - ・2点目は、「普通教室」とあるが、「特別支援学級」が含まれているのかどうか。

・3点目は、「教員の校務用 PC 整備率」が100%を超えているが、教員の人数以上に整備されているということか。

- 課長
- ・1点目は、100%を目指すことは間違いない。
 - ・2点目は、「普通教室」は「特別支援学級」も含んでいる。普通教室ではない教室は、理科室や音楽室といった授業のために移動する教室のことで、特別教室と呼んでいる。「普通教室無線 LAN 整備率」が94.8%となっているが、実際には昨年度末100%になっていた。今年度、子どもの人数の関係で普通教室でない教室を普通教室にしたところ、その教室にWi-Fiが整備されていなかったためにこの数値になったのだが、隣の教室から十分接続できている。
 - ・3点目は、「教諭」の分について100%で、市で雇用している支援員や相談員の分を含めると100%を超えるということ、余分に整備しているということではない。
- 委員
- ・小学1年生から6年生までが同じ学校で過ごすには、幅が広すぎて大変ではないかと思う。例えば、校長先生があいさつをする場合、1年生向けにするのか6年生向けにするのか。小1から小3まで、小4から小6まで、中1から中3までという分け方のほうが子どもに接しやすいのではないか。
- 課長
- ・義務教育学校や小中一貫校の校長先生からは、全校集会で誰を対象に話すかやはり悩むということで、そのとき話したい内容によって対象を変えて全員に聞いてもらっている、と聞いている。
 - ・中学生が小学校低学年と接することにより思いやりの心が芽生える、小学校低学年が中学生と接することにより憧れを持つ、というメリットがあると聞いている。
- 教育長
- ・全校の前で話す場合は、6年生向けに話し、低学年の子には担任の先生から伝えてもらうというのが現実的な対応である。
- 委員
- ・羽島の桑原学園や北方学園の現在の状況を教えてほしい。また、岐阜県内の学校は義務教育学校なのか小中一貫校なのか。
- 課長
- ・桑原学園からは、異学年交流ができる、中学校教員による小学校の教科担任制できる、免外指導が解消されるということがメリット。中学生がリーダーシップをとるため一般校に比べて6年生がリーダーシップをとる機会が少ないというデメリットはあるが、それを解消するため新たなグループをつくる工夫をしている、と聞いている。
 - ・岐阜地域内は、義務教育学校は、羽島市の桑原学園と、令和4年度からの本巣市の根尾学園、令和5年度からの北方町の北方学園。小中一貫校は、岐阜市の厚見小学校と厚見中学校、岐阜市の藍川小学校と藍川北中学校がある。
- 委員
- ・小学校も英語教育を実施する現在、小中一貫校だと効率がいいと思うが、どうか。

- 委員 ・中学校から英語の教員が派遣されるが、中学校の英語の教員数や時間数により、学期に1回の派遣が現状。
- 委員 ・子どもたちの学習の進捗という面ではどうか。
- 委員 ・小学校の英語の授業は基本的に担任が行う。小学校の教員が英語の研修を受けて力をつけているが、中学校の英語を知っている場合とは違う。中学校からの派遣はありがたいが、もう少し多く派遣がされれば、学力の向上もあるのではないかと思う。
- 委員 ・一貫校なら先生が同じ学校にいたので、効率よくできるのではないか。
- 委員 ・現在は2校の校長同士の話し合いが必要だが、一貫校なら校長がひとりで教育目標が一貫しているというメリットがある。美山中からいわ桜小までは15分くらいかかるので、その距離がやりにくさにつながっている。
- 委員長 ・中学校の教員が教えることによって、音楽、図工、体育、家庭科などの技能教科では圧倒的に変わるので、小学校の教科担任制は非常にいい制度。地理的な問題はあるが、うまくやれば効果は絶大。そのためには、校長同士の協力や小学校の教員も中学校で教える、ということが前提になると思う。
- 委員 ・資料4-2の、メリットとデメリットについてやや理解できたが、いじめ問題はどう組み入れられるか。
- 課長 ・下の学年の子を思いやる気持ちを持つということなど、人権感覚を養うことにもつながると感じている。いじめ問題に対してもメリットにはなるのではないかと思っている。
- 教育長 ・いじめは、学校の違いよりも、精神的な発達の中で起こると思う。義務教育学校だから多いとか少ないとか、そういう見方はしなくていいのではないかと思う。
・小6から中1に進学するときいろいろな不適応が起きているので、そこを滑らかにつながるようにきめ細かく見ることができるといいう利点が、義務教育学校や小中一貫校にはあると思う。
- 委員 ・資料4-2に、いじめに関して保護者が見て安心できるような文言があるといいと思ったので尋ねた。
- 委員長 大事な指摘だ。
- 委員 ・資料4-2「リーダーシップや自主性を養う機会の減少」に関して。3月に入ってから、年長の子どもが、4月から「保育園で一番上の年長になるから」と、心が急に成長したと感じる。また、甥が6年生になってから責任感を持ちリーダーをとるようになった。
・小中一貫校や義務教育学校は、中3に頼ってしまうことで「一番上だから責任を持つ」という機会が減り、心の成長やリーダーシップが失われてしまうのではないかと心配するがどうか。

- 課長 ・ 現実に、小中一貫校や義務教育学校に勤務する教員はそこを課題としている。小中一貫校は、小6がリーダーになる場面がまったくないわけではなく、小6や小5がリーダーになる場면을意図的につくり補っている。
- 委員 ・ 小中一貫校の資料が出てくると、小中一貫校を検討する目的があるように思える。小中一貫校でなくても、資料4-2にあるメリットはできていると思う。「様々な異学年交流が可能」は、現状、資料2に「縦割り班活動」や「異年齢集団による学習」、「異学年で教え合うダビンチルーム」などできているので、小中一貫校だからこそそのメリットではないと思う。デメリットの「リーダーシップや自主性を養う機会の減少」も、自覚や自信を持って大人になる上でも必要なことだと思うので、このままのかたちでいいと思う
- ・ 今後、小中一貫校にしたほうがいいとなったら議論は必要だが、そうでなければ、教員の数を増やすとか土曜日に交流するとかで、子どもたちのための教育は十分できると思う。また、保育園、幼稚園にも目を向けて、年長が次年度に向けて小学校で積極的に交流すればギャップを解消できると思うので、検討してほしい。
- 委員長 ・ この資料は、前回、要望があったので出てきたものと理解している。
- 委員長 ・ それでは、これらの資料を基にして、山県市の小中学校の現在の状況を考えながら将来の学校の適正規模をどう考えるか答申することがこの会の目的なので、全員、現時点での考え方や思いを話してほしい。
- 委員 ・ 高学年の教科担任制を行っているが、現在の教員数ではすべての教科がそろっているわけではないので限界がある。英語は、学期に一度、伊自良中の教員の派遣があるが、ほかは教頭が行っている。
- ・ 先日、中学校の体験入学を行ったが、たった一日だけ。来年度は、伊自良中学校区の3校では、中1ギャップ解消のために5、6年生と中学生で活動や行事を行うことや、南北の小学校で普段からオンラインでもっと交流を深めることを考えている。
- 委員 ・ 学校の規模に関するアンケート調査結果を保護者へ説明したところ、こんな意見が寄せられた。「6年生のカリキュラムは専門の教員の指導が必要」「小中一貫教育は今後必要」「最近の子は体力が低下してきているので、地元の小学校へ歩いて通い体力をつけてほしい」「きめ細かな指導を望んでいる保護者が多いのではないか」「少人数であるがために不利益を被らないようにしてほしい」「児童数は減少しているが、たくさんの体験をさせてもらい先生方に感謝している」「適正化については先延ばしせず、今から積極的な議論をすべき」「外に出て社会性を育む農業体験や職業体験などの機会をつくってほしい」「統廃合が子どものためになっているのだろうか」「ひとりひとりの役割があることで、子どもが成長できる場がたくさん生まれる」「子どもたちがのびの

びと安心できる環境があれば、人数は問題ないのではないか」

・大桑小は、「学校が楽しい」と答えている子は100%。不登校はなく全員が教室で勉強しており、休み時間はグラウンドで仲良く遊んでいる。

・大桑城の勉強を進めており、今年度、5、6年生が福井県的一条小学校へ行き、あちらの歴史の勉強をした。来年度は、一条小学校が修学旅行中に大桑小にも寄ってもらえるので、歴史の交流をしたい。

・小規模校から中規模校へ行くと、急に生徒数が増えるから不登校になるのではないかという心配があるが、大桑小出身の1、2年生に不登校はいないとのこと。ひとりひとりに役割があるため、子どもたちに力が付いているのではないか。

・大桑小は150周年で、歴史と伝統を生かし、地域の皆さんと明るく楽しい学校をつくっていききたい。

○委員 ・5つの学年の3クラスに3人の担任では非常に苦慮しており、小さな学校では、教科担任制は困難。

・保護者のアンケートでは、「地域に学校は必要だ」「学校がこれ以上遠くなるのは負担が大きい」「もっと交流を増やしてほしい」という意見が多い。

・来年度、美山小の体育や英語の授業に週1回、5、6年生がスクールバスで行くことを試す。子どもだけでなく教師も交流し、授業の力を付けることが大事と考えている。

○委員 ・学力よりも子どもの心の成長が大事だと思うので、現時点では、小中一貫校や義務教育学校よりも小学校、中学校というかたちでの流れが大事だと思う。

・資料1のとおり、児童生徒数の減少が何よりも大きな問題だと思う。

・小学校、中学校それぞれを残すことは大事だと思うが、統廃合すべきなのか、複式学級のメリットを最大限に生かした山県市モデルをつくるのかということが、この検討委員会の一番の課題だと思うので、議題として取り上げてほしい。

○委員 ・保育園では一緒に、小学校で離れ、また中学校で一緒になるということがとても疑問。

・年長の子どもは、小学校で友達と離れるのは寂しいと毎日言っている。そういう子どもの意見を大事にしたいので、子どもの意見を聞くことができたらいと思う。

・「バス通学はどうなのか」「地域との交流ができなくなるのでは」「伝統を大事にしたいので小学校は残してほしい」という意見も聞く。

○委員 ・「先生が目が行き届いていない」「学級崩壊が起きている」という状態を聞き、年長の保護者は大変不安に思っている。先生が目が届くという面では単学級のメリットを感じるので、慎重に考えたい。

○委員 ・大きな学校へ行けば大人数の子どもと交流ができるが、小規模ならではのメ

リットを伸ばし、デメリットを正しく理解してそれをなくす努力が必要ではないか。こういう場で意見交換ができればデメリットをなくせることもある。

・自分の子どもは6年生になった時、考え方がかなり変わった。6年生が最高学年というのは、心の成長を手助けするには良い環境だと思う。

・山口市は子育てしやすいということが分かれば、市外から移住する人が増えると思うので、子育て支援をPRする努力が必要だと思う。

○委員 ・市の魅力を発信するなど色々対策はしていると思うが、さらなる活性化にご尽力いただきたい。子どもの人口減少が減れば、統廃合という話もなくなるのではないかと思う。

・誰を主にして考えるかによって、統廃合するのか今後も残すかというのは考え方が分かれるのではないかと思う。卒業生の立場からすると、母校がなくなると悲しいし、自分の母校に子どもが通うのはすごく嬉しいので、自分たちが育ってきた学校は残してほしい。

・アンケートの結果は、「子どもたちひとりひとりに目が届く教育」を望む意見の割合は多いのではないか。今の少人数の学校規模が、子どものためでもあり保護者にしてみてもありがたく、一番理想。

・いじめや不登校の解消のための一つ的手段として、規模をあえて小さくして少人数で先生や地域の方の目が行き届くようにすることが大事ではないか。

・中学校では制服の問題が出ていると聞く。登校中の生徒を見ると、制服ではなくジャージが多く、中学校の保護者に聞くと、制服を着る回数は少ないとのこと。何万円という制服を買ってもほとんど着ないなら意味がないという意見もある一方、制服は必要という意見もある。小中一貫校になったとき、制服はどうなるのか疑問に思う。

○委員 ・今も昔も学校は地域のまちづくりの核になっている。

・10年後も現状のまま学校が運営できれば問題ないが、子どもの数が減り明らかに学校が存続できないからどういう方法をとるのか、ということ为先人として打ち立てるのがこの委員会の役目。

・検討委員会に学校運営協議会の意見も入れてほしい。

・少子高齢化の中、どうしたら学校を存続できるかと検討した結果、岐阜市は小中一貫校を取り入れたということ。

・12年前、地域は反対だったが、子どもの未来がかかっている、複式の学校で子どもを育てるわけにはいかないということで、美山小学校に統合している。

・未来ある子どもたちのためにどういう学校をつくるか、ということを根底に考える必要がある。

○委員 ・複式学級は、ひとつの教室で二人の先生が授業をすると、ほかの先生の声が耳に入るのではないか。

- ・統合の話は10年以上前にあったが、母校がなくなるという意見がかなり出て流れた。親の意見だけで子どものことを全然考えてないという話があった。
- ・南北の小学校が統合したとしても、いずれまた少なくなる。

- 委員
- ・地域にとって学校は非常に大切なものと思っている。
 - ・跡継ぎが非常に少なくなっている現状、小学校がなくなると転入を諦めるといった声も出てくる。
 - ・その反面、児童生徒数は今後かなり減るので、かなり極端な話だが、山県市で1校にできないものか。

- 委員
- ・検討委員会をとおして皆さんの声が大きくなるように、できるだけ努力をしていきたい。

- 委員長
- ・どの方の意見も説得力のあるものだったと思う。
 - ・今、いかにすばらしい学校経営がなされているということはわかったが、それと10年後を見越して考えるということは違う。
 - ・まず、ひとつには少子化の現状を踏まえて考えていくということは避けられないので、そのことをどうとらえていくかということ。
 - ・もうひとつは、今の学校がいいということは皆さんの共通理解としてあるが、義務教育学校や小中一貫校以外のもっといいかたちの新しい学校もあるのではないか。そういったことも含めながら、また次回考えていければと思う。
 - ・それぞれ皆さんの意見を持ちつつオープンマインドでやっていかないと、この問題はなかなか進んでいかない。現状と、5年後10年後、未来を考えていく必要がある。
 - ・複式学級というのは、教育的に配慮すべき事があると思っている。
 - ・今日の意見を元に、事務局に論点整理をお願いしたい。

6 次回の委員会予定

(略)

7 閉会

午後3時50分閉会

上記議事録(要旨)は正当であることを認めます。

山県市立小学校及び中学校適正規模等検討委員会委員長 早川 三根夫